

# 仕事と家庭の相互充実を支援する Digital Story Telling(DST)による実践の開発と評価

荒木 淳子 佐藤 朝美  
Junko ARAKI Tomomi SATO

産業能率大学 愛知淑徳大学

SANNO University Aichi Syukutoku University

〈あらまし〉本研究では、子育て期（末子が小学生以下）の働く女性を対象とし、女性自身が仕事と家庭との相互充実を図りながら将来の自己像を構築するための実践を開発し、その効果を評価する。働く女性の多くは出産とともに職業上の自己と家庭での自己との葛藤に直面し、それぞれの自己を踏まえ将来に向けた新たな自己像を構築することが必要であると指摘されている（Ladge and Greenberg 2015）。近年、キャリア・カウンセリングではクライアントのキャリアに関するストーリーを引き出すことで、個人のキャリア・アイデンティティ形成を支援する手法が注目されている（サビカス 2015）。そこで本研究では Digital Story Telling (DST) を用い、子育て期女性の新たな自己像構築のための支援を検討する。

〈キーワード〉自己概念、Digital Story Telling(DST)、キャリア支援、子育て期女性

## 1. はじめに

少子高齢化による労働力不足や女性の活躍推進のため、日本では男女共同参画社会基本法の制定（1999 年）以降、内閣府男女共同参画局を中心に仕事と家庭の調和を目指すさまざまな施策が実施されてきた。この間、民間企業においては、産前産後休業や育児休業などの子育て支援、介護休業制度といったワーク・ライフ・バランス（以下、WBL）施策が整備・拡充された。政府は、2020 年までに企業における女性管理職の割合を 30% にまで引き上げることを目標とするなど、仕事と家庭の両立に関する関心が社会的に高まっている。

しかし企業における WBL 施策の充実が進む一方、日本では依然として出産前に働いていた女性の約 6 割が第一子出産後に離職しており、この数字は 30 年間でほとんど変わっていない（国立社会保障・人口問題研究所「第 14 回出生動向調査」）。企業の管理職に占める女性の比率も欧州諸国に比して低いなど、日本では女性が仕事と家庭での役割を両立していくことはまだ困難な状況にあると言える。さらに仕事と家庭の両立は女性だけでなく、親の介護等男性にとっても身近な問題である。このように日本では、企業だけでなく社会全体において、働く人の仕事と家庭の両立をどう支援していくかが課題となっている。

## 2. 本研究の目的

本研究では、仕事を持って働く子育て期女性（末子が小学生以下）を対象とし、将来の仕事における自己像を明確にすることで仕事と家庭との相互充実を支援することを目的とする。

近年、仕事と家庭のバランスについては、双方のコンフリクト（金井 2002）だけでなく、仕事と家庭での役割が互いに肯定的な影響を与え合う「仕事と家庭の相互充実（work-family enrichment）」（Greenhaus and Powell 2006）に関する研究も進んでいる。「仕事と家庭の相互充実」とは、「仕事と家庭において片方での役割がもう一方の生活の質を向上させること」である（Greenhaus and Powell 2006）。これまでの研究では、仕事と家庭の「肯定的なスピルオーバー（あふれ出し）」が、個人の心身の健康を促進するだけでなく、仕事への満足度やモチベーション、仕事に関わる能力の向上につながる事が明らかにされている。女性だけでなく男性においても、家庭や地域といった複数領域の活動や役割に従事することが、組織コミットメントや仕事満足度を高める効果のあることも実証されている（Kirchmeyer 1992）。今後のキャリア支援においても、職場だけでなく、こうした複数の空間（領域）での役割を含めたキャリアについて統合的に支援することが求められるだろう。

異なる空間（領域）における自己を両立させる

必要性に最も迫られる時期の一つが、就業前の子どもを育てる子育て期である。特に働く女性にとっては、第一子出産後に育児をしながら仕事復帰を果たし、キャリア形成をしていくには様々な困難がある。物的、社会的困難に加え指摘されるのが、心理的な困難である。

仕事に対して責任感ややりがいを感じている女性ほど、出産後の働き方や仕事にギャップを感じ悩んだり仕事を辞めたりするという(中野2014)。Ladge and Greenberg(2015)は、専門的な職業に就く女性が初めて出産した場合には、職業上の自己に母としての自己を加え新しい変化に適応していく必要があることを論じている。そして新しい変化への適応戦略の一つが、将来の仕事における自己像の再構築である。Wayne et al.(2006)もまた、仕事と家庭の相互充実には、自己概念に基づいて職場と家庭での役割に重みづけをしながらリソースを用いることが必要だと述べている。子育て期女性への支援には知識や情報を提供するものや悩みを共有するものはあるが、自己像の再構築に関するものはまだない。そこで本研究では、働く子育て期女性自身が仕事における将来の自己像を再構築する過程を支援する実践を開発し、その効果を評価する。

### 3. 研究の方法

本研究では、仕事での役割と家庭での役割を踏まえた新たな自己像を持つための具体的な方法として、「働く女性の後続である女子大生へ伝えるメッセージづくり」を目標としたDSTワークショップをデザインする。DSTは写真や動画、音楽を用いて作品を作りながら自己を物語るための有効な手法として知られる。たとえば佐藤ら(2013)は、DSTを用いて家族のNarrative Skillを支援する実践を行っており、「経験の意味づけ」を行う活動にはDSTが適していることを指摘している。また、自らの感情を整理して語る上でもDSTは適した手法と言える。

新しい変化への渦中にある子育て期の働く女性たちは、仕事と家庭における葛藤や問題を多く抱えている一方、それらに対応する中で、肯定的スピルオーバーが生じていることも想定される。そのような体験を整理し、各自が伝えたいメッセージを作成する。後輩を対象に何を伝えるべきか、検討していく活動において新たな自己像が構築

されるものとする。

#### 【WSの活動と狙い】

活動1	参加者の属性の共有→仕事での役割・家庭での役割を整理
活動2	参加者の体験談の共有→大変さを吐露し、共感し合いながら、肯定的スピルオーバーが生じるきっかけについて考える。
活動3	メッセージ作りとDST作成→大変かつ葛藤ある体験が仕事や家庭での自分に与えた意味を考え、大事なメッセージを抽出し、DSTの作品に落とし込む。
活動4	DST鑑賞会→自身のものだけでなく、他者作品のメッセージも取り入れながら、職場での自分・家庭での自分を統合し、新たな自己像を見つける。

### 4. 研究結果の分析

参加者には実践の前後にインタビューを実施し、将来の自己像について語ってもらう。インタビューデータはすべて文字化した上で、サビカス(2015)のキャリアストーリー・アセスメントを参考に、自己に対する語りの変化を質的に分析する。

#### 【分析の視点】

マイクロナラティブ	重要な出来事やエピソードに就いての小さなストーリー
マクロナラティブ	マイクロナラティブをつなぎ合わせた自己自身のライフ・ストーリー
キャリア・ストーリー	予期しなかった出来事への対応。予期に反した出来事に納得できるような意味を与える。
キャリア・テーマ	人生を全体的なものにする統一的な考え。

### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 26350338 (代表: 荒木 淳子) の助成を受けたものです。

### 参考文献

- Ladge, J. and Greenberg, D.N.(2015) Becoming a Working Mother. *Human Resource Management*, 54(6): 977-998
- 佐藤朝美・椿本弥生・朝倉民枝 (2013) Family Narrative 支援活動「未来の君に贈るビデオレター作成WS」のデザインと実践. *日本教育工学会論文誌* 37(3):229-239.